

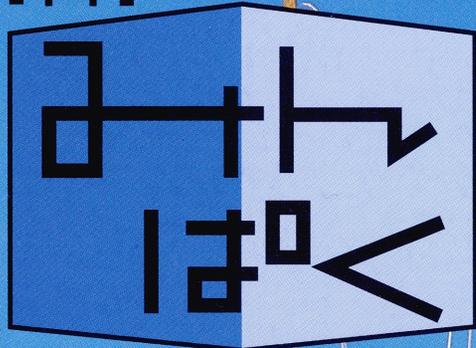
月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成20年3月1日発行 第32巻第3号通巻第366号

国立民族学博物館

2008

3



地の先へ
知の奥へ
みんぱく
30th
Anniversary

特集

西南中国

「総合」とは何か

日高 敏隆

「総合」「総合」っていうけれど、「総合」っていったい何なんだ？総合地球環境学研究所ができたとき、まず問題になったのはそれだった。

世のなかには「総合大学」というのがある。医学部だけでできている医科大学は単科大学だ。これはすぐわかる。そして、京大や東大のように複数の学部から成るのは総合大学という。

けれど、学部がいくつあつたら総合大学になるのか？そう考えたらわからなくなる。

たとえば京大には一〇学部があり、何百という学科があるが、だから総合大学か？

学部がちがうと先生も学生も互いにほとんど顔も知らないという状態で、「総合」的な教育も研究もおこなわれているとは思われない。それでも「総合」大学なのか？

こんな議論のなかでほくは考えた。

地球環境学というのはたしかに総合的な学問である。そこには自然科学的な問題ばかりでなく、人文社会学的な問題が、つねにからまっている。「総合」的に研究を進めねば、問題の解決には近づけない。けれど、その「総合」とはどういうことなのだ？

いろいろ議論しているうちに、ほくはふと、じつにふざけた表現を思いついた。「総合とは五目チャー

ハンのようなものである」。

旨い五目チャーハンを作るには、コメとか肉とか油とか、いろいろな専門の人が必要である。

けれど、そういう専門家をひとつと集めたら、それでよいのか？

専門家たちが、それぞれ自分の作った自慢のコメや肉や油を皿に入れて並べる。それをひとつずつ食べていけば、旨い五目チャーハンができるのか？そんなことはけつしてない。

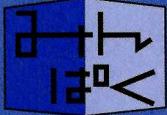
五目チャーハンを作るには、専門家たちのコメや肉や油をひとつのフライパンにほつり込み、火にかけてそれをはげしくかきまわす。そしてそれをまとめて食べる。それでこそ、「おっ、旨いチャーハンだ！」ということがわかる。総合とはこんなものだ。ほくはそう考えたのである。

その後フランスを訪れたとき、「総合とは何だ？」という議論になった。

フランスではチャーハンのことをリ・カントネイ (riz cantonais) つまり広東ライスという。「総合」とはリ・カントネイのようなものですよ。「ほくのこのことは、フランスの研究者たちは、皆大きくうなずいてくれた。

ひだか としたか / 1930年東京都生まれ。動物行動学者。京都大学名誉教授。東京大学理学部動物学卒業。理学博士。『春の数えかた』(新潮社)で日本エッセイストクラブ賞受賞。『人間は遺伝か環境か？ 遺伝的プログラム論』(文藝春秋)、訳書『ソロモンの指環』(早川書房)ほか著書・訳書多数。

月刊



目次

MARCH 2008
月刊みんばく

3

01 エッセイ 世界へ世界から
「総合」とは何か
日高 敏隆

02 特集 西南中国

多彩な少数民族
塚田 誠之
王朝から見た異人たち
武内 房司
ペー族の木の匠
横山 真子

トン族にとって「チャー」とは？

兼重 努
観光商品としての水かけ祭り
長谷川 清
エスニックマーカーとしての道教宗派
吉野 晃

08 モノ・グラフ
民博のお宝映像・お蔵入り映像
大森 康宏

10 地球ミュージアム紀行
メキシコのお盆
鈴木 紀

11 表紙モノ語り
あやつり人形劇の人形
塚田 誠之

12 みんばくインフォメーション

14 万国津々浦々
ソロモン諸島の「公平」さ
田中 求

15 万国津々浦々
モンゴルの「産業遺産」
前川 斐

16 外国人として生きる
僕のこと
ハン チェドン

18 地球を集める
アムール川をいく白樺の舟
佐々木 史郎

20 生きもの博物誌
秘伝の味
山本 睦

22 フィールドで考える
ガーナの薬屋さん
浜田 明範

24 開館30周年記念事業のご案内
編集後記

西南中国

著しい経済成長や北京オリンピックと、最近話題にことかかない中国。漢族が活躍していると思われがちだが、少数民族も存在する。西南中国は多くの少数民族が錯綜して居住する地域である。市場経済化のなかで、多彩な文化が観光化されているこの地域に注目し、従来とは違った顔をもつ中国について触れてみたい。



着飾ったミャオ族の女性 (貴州省)



チワン族の高床式住居 (広西チワン族自治区)



水かけ祭りで、タイ族の娘たちから歓迎される観光客(雲南省)

多彩な少数民族

塚田 誠之
(つかだ しげゆき)

本館先端人類科学研究部

文化的な差異

多民族国家中国では五五の少数民族が公認されている。総人口約一三億人の八パーセントほどに過ぎないが一億人を超える。うちチワン(壮)族は人口がもっとも多く一六一八万人を擁する(二〇〇〇年)。少数民族のうち三〇以上の民族が広西、雲南、貴州、四川、チベット東部などの西南中国を主要居住地としている。少数民族には下位集団が存在する場合が多い。ヤオ(瑶)族の場合、言語上は三つのグループに分類されるが、広西の金秀ヤオ族自治県では文化的に差異のある五つの下位集団が共存している。民族は決して一枚岩的存在ではないのである。

中国の歴史は一面では漢族の勢力拡大の過程である。古代には四川や雲南などで独自の青銅器文化が発達したが、のちに漢族の勢力がおよんだ。漢族が非漢族と接触した際には図説を含む記録が漢族の側から書かれた。漢族の進出は非漢族の「漢化」現象をともなった。たとえば、チワン族の高床式住居は一見、非漢族に独自であるようだが、漢族の影響が随所に見られる。家の前門から祭壇を結ぶ中心のラインの重視、門に門神を貼り、柱に縁起のよい詩句を書いた「対聯」を貼ること、鉄製の農具や鍋、カマドでの調理、イス・テーブルなど家具、建築の際に風水を見ること、柱を貫で結合した「穿

漢族と非漢族

居、銀を好み女性の装身具に用いる習俗、漆器や竹木製の道具、蘆笙や銅鼓の楽器など、どれも特徴がある。また年中行事について、多くの非漢族が漢族同様、春節(旧暦正月)を歳首とするが、タイ(傣)族は仏暦によって四月を歳首とする。イ(彝)族やペー(白)族のたいまつ祭りやチワン族の歌掛けなど独自の行事もある。少数民族のうち一二が伝統的な文字をもつが、西南中国ではイ族やタイ族の文字、ナシ(納西)族のトンパ文字に特徴が見られる。

闘式構造などが挙げられる。チワン族は、春節や三月の曇参・中元節・中秋節などの年中行事の過ごし方に漢文化を受容した。しかし、他方で、歌掛けや行事食品としてモチ米製品を用いる点に独自性が見られる。なお、ペー族の木彫技術のように、漢族から受容した文化が独自に発展したり、非漢族のあいだでも地域社会での力関係にともなう影響の授受があり、漢族・非漢族の二分法だけでは語れない。そのことはトン(侗)族のことばの多義性にも垣間見られる。漢族自身にも文化変容があるし「近代化」による影響もあるが、歴史の

潮流として、非漢族の文化は漢族をはじめとする外部との交流を経て形成されてきたのである。近年、グローバル化の進展の下、観光業が発展し、文化の商品化・産業化が進み、農村が大きく変貌を遂げるなどあらたな局面を迎えている。この動きは雲南のタイ族の村など各地で生じている。あらたな文化形成の動きは現在も進行中である。少数民族の多彩な文化を知り、その現在の動向を注視することは中国文化のもつ奥深さを理解するうえで意味のあることである。



五色に染めたオコフ。チワン族の3月3日の祭りの行事食 (広西チワン族自治区)

除夜の日に門神、対聯の貼り換えをすところ (広西チワン族自治区)



王朝から見た異人たち

武内 房司
(たけうち ふさじ)

学習院大学教授

少数民族の姿と習俗

中国の歴代の王朝には、今日で言えば国内の少数民族を含めて朝貢にやってくる国々や民族地区の人びとを絵画に描くならわしがあった。世界のさまざまな国や民族の使者が中国にやってくるのは中国の文化や支配者の徳のたかさを示すものだとする考え方に基づくものだった。自分の文化や徳を誇示することを目的として描かれたこうした資料を『職貢図』とよんでいる。とりわけ、歴代王朝のなかで最大版図を獲得した清の乾隆帝が一八世紀半ばに製作を命じた『皇清職貢図』は有名である。そこには、朝鮮の官僚を描いた「朝鮮国夷官」からはじまり、男女一対からなる三〇〇以上もの民族の図像が収められた。

この『皇清職貢図』の編纂は王朝の権威を誇示するための公的な編纂事業だったが、これに刺激を受けてか、一八世紀から一九世紀半ばにかけて、民間でも中国各地に住む民族の姿や風俗が盛んに描かれるようになった。そこでは、各民族の姿がヴィジュアルに描き出されるときにも、各民族のめずらしい習俗が文章で簡潔に紹介された。いわば絵画と説明とがセットになっていることから、しばしば『〇〇図説』といったタイトルがつけられた。

貴重な資料として

これらの『図説』の編纂にかかわったのは、多くの非漢族が住むことで知られる貴州や雲南といった中国の西南地域に赴任した地方官たちだった。これらの『図説』が製作されはじめたのは、一八世紀以降、西南諸地域で許されていた少数民族の首長(土司)による間接統治が廃止され、中央派遣官僚(流官)による直接統治へとときりかえられる、いわゆる「改土歸流」政策が採用された時期にもあたっている。言語や文化の異なる地域に送り込まれた漢族出身の地方官は、今まで触れたことのない民族の習俗に好奇のまなざしを向け、画家たちにその姿や習俗を描写するよう命じたのだった。序文などを読むと、しばしば、決し

てもめずらしさから編纂したのではなく、あくまで統治に役立てるためである、などともっともらしいことが書いてある。しかし、古代日本の歌垣にも似た祭りをつうじて婚姻対象を選ぶなど、形骸化した儒教の規範に縛られることない貴州の少数民族の姿が地方官

や儒教知識人たちに清新な印象を与えたことは想像に難くない。こうした異文化への強い関心によって支えられ、編纂された『民族図説』は、その大きく変容を遂げた西南中国の少数民族社会を知るうえでも貴重な資料といえる。



貴州省の貴陽付近に住んでいたクーラオ族の女性の抜歯習俗を紹介したもの。説明では、嫁ぐ娘が夫に牙をむかないように抜歯するとあるが、成人式としての意味をもっていた



貴州の貴筑などに住んでいた「土人」の舞(な)の祭りを描いたもの

『精絵苗蛮全図』(慶應大学言語文化研究所蔵)より

木匠の一族

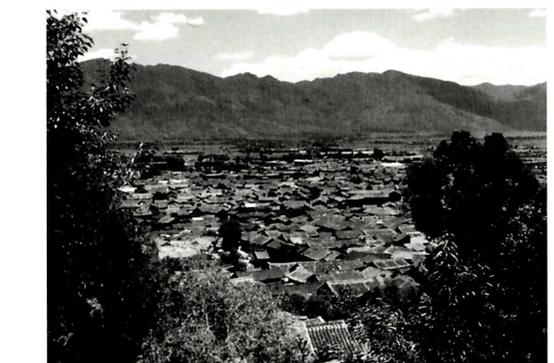
横山 廣子
(よこやま ひろこ)

本館民族社会研究部

中国木彫の郷

世界遺産登録された雲南省麗江の町の魅力のひとつは、古い家並みである。高台に立つと、黒みを帯びた麓の見事な連なりが望める。その多くの家は、おもな住人であるナシ族ではなく、麗江の南隣りに位置する剣川県のペー族の手工の手で建てられた。一九四〇年代に麗江に滞在し、『忘れられた王国』を著したグーラートは、ペー族の手工の卓越した腕前を讃え、昆明やそのほか雲南の主要都市の金持ちが彼らを招いて屋敷を建造すると記している。

剣川の手工が建てる木造建築のすばらしさは、太い柱を組んで姿美しく頑丈につくられる構造もさることながら、扉や窓、梁の装飾などにはどこかされた精緻



古い家並みが連なる麗江の町。世界遺産登録前(1996年)



花鳥を彫った剣川の木彫。壁かけ細部

な木彫がある。花や鳥、動物などを配置した木彫がはめ込まれた扉は「格子門」といい、ペー族の家ならそれがあって当たり前である。余裕のある家や寺院などの扉の幾重にも重なった透かし彫りは、息をのむべきほどの透かし彫りは、仕上げるため、一人で四〇本以上のノミを使う者もいる。彫る対象によって、鳥の眼、羽、石、枝葉、花びら、花心、さらには松葉、梅の花、蓮の花、蓮の葉など異なるノミを使いわけ、木工は中国語で「木匠」というが、彼らはまさに「木の匠」とよぶにふさわしい。その木彫技術は、文化大革命を乗り越えて現代まで継承されており、一九九六年に中国政府文化部は、剣川県に「中国木彫の郷」の称号を与えた。

漢族をしのぐ水準

この木の匠の技の歴史はすべて明らかになっていくわけではない。しかし漢族の仏教建築技術を受容していることは定説になっており、端緒は唐代にさかのぼると言われる。当時、大理を中心に西南中国を支配した南詔国は、四川などに攻め入って技術者を連れ帰った。『蛮書』は南詔の支配者の築いた御殿の雄壮さを記録している。南詔末期に大理盆地に創建された崇聖寺仏塔は、唐の都長安の大雁塔によく似ている。剣川県石鐘山石窟の石彫は仏教の隆盛と足並みをそろえ、南詔から大理時代(宋代)に刻まれた。

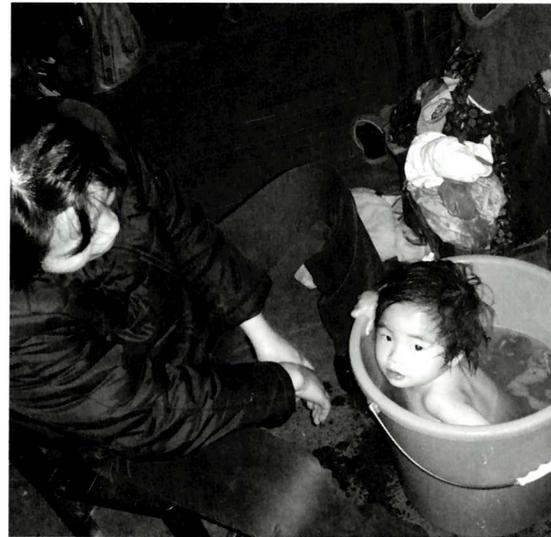
中国西南部の少数民族のあいだでは、このように、元来、漢族から流入した技術が独特に洗練され、地域内の漢族をしのぐ水準にまで到達したものが少なくない。それは西南少数民族の工芸のひとつのあり方である。ある地区のある人びとに特定の技術が発達し、専門化し、他の民族にその技術を提供する。多民族が錯綜して居住する中国西南部には比較的よく見られる現象である。たとえば、戸撒地区のアチャン(阿昌)族は刀鍛冶に優れ、「戸撒刀」の名は雲南中に響きわたっている。彼らは国境を越えてミャンマーなどへも出向き、人びとからありがたがられていた。剣川は比較的標高が高く、他のペー族地域に比べて稲作が難しい地域である。その技を磨いた木の匠たちも国境地域まで足を伸ばして稼ぎ、活躍していたことが知られている。

西南中国

トン族にとって「チャー」とは？

兼重 努
(かねしげ つとむ)

滋賀医科大学准教授



わたしが世話になっている家の孫娘。2歳になるまではわたしを恐れていなかった

わたしは一九九〇年から、広西チワン族自治区の三江トン族自治県北部の、とあるトン族の村に通っている。現地のトン語で漢族のことを「チャー」という。漢族のサブ・グループである六甲人は「チャー・ケ」という。ケとは客。すなわち「外来の漢族」という意である。

しかし、必ずしもチャー＝漢族というわけではない。なぜなら、日本人であるわたしも現地でチャーとよばれるからだ。当初はわたしが漢族と間違えられているからだろうと思っていた。しかし、人びとは日本人と承知のうえで、わたしのことを「チャー・イツベン」とよぶ。イツベンとは日本の意味。つまりわたしは「日本のチャー」なのである。あるとき村に金髪碧眼のフランス人女性がやってきた。驚いたことに、彼女に対してもチャーという呼称が使われた。さらに、チワン族は「チャー・シヨン」、ヤオ族は「チャー・ユー」、ミャオ族は「チャー・ミュー」ともよばれる。トン族にとってチャーとは異民族一般を包括しうる概念でもあるようだ。

さらに別の含意もある。人民解放軍に入隊することを「チャーになる」という。警察官もチャーとよばれる。トン族であるうがなろうが兵士や警察官はチャーなのである。また公務員になって、お上から給料をもらって生活することを、「チャーの飯を食う」という。チャーは官憲や公権力の類を連想させることばでもあるようだ。

わたしはチャーとよばれるのは嫌いだ。幼い子どもたちにとってチャーは恐怖の対象でもあるからだ。大人たちは「チャーがおまえを袋にいれて連れ去るぞ」とか「チャーがおまえの腸をえくりだすぞ」という紋切り型の表現で、しばしば幼い子どもを怖がらせている。わたしが世話になっている家の二歳の孫娘が、急にわたしに寄りつかなくなった。大人からさんさんチャーの話が聞かされたからにちがいない、とその子の祖父はわたしに解説した。

チャーということばが多様な意味やイメージを担うのは何故なのか。それが今後の検討課題だ。

観光商品としての水かけ祭り

長谷川 清
(はせがわ きよし)

文教大学教授



観光スポットである「洗水節・印象」の水かけ祭りの看板。観光客は大勢のタイ族女性から歓迎される

雲南省には異なった言語系統に属する多様な少数民族が居住している。一九九〇年代以降、急速に進展してきた民族観光や民族文化の産業化は、長らく伝統として保持されてきた彼らの生業様式、風俗習慣、宗教信仰などに大きな変化をもたらしている。西双版纳タイ族自治州において、タイ族を中心におこなわれる水かけ祭り(洗水節)の事例は、こうした問題を考えるうえで、示唆に富んでいる。

水かけ祭りは、タイのソングラン、ラオスのピーマイと同様の起源をもつ、タイ族の新年行事である。一九八三年、タイ族の民族行事に指定された。この行事が開催される四月には、毎年多くの観光客がシーサンパンナを訪れる。しかし、今日では正式の新年行事以外の機会や場において、観光のアトラクションとしてもおこなわれている。

観光化のなかで、周遊ルートに沿ったタイ族村落ではタイ族文化をテーマとする観光開発が進んだ。その典型が瀾滄江(メコン川)沿いのムンナム地区にあるタイ族園である。一九九八年、マスツーリズムの弊害を防ぎ、タイ族の生活環境をまるごと保存しつつ、観

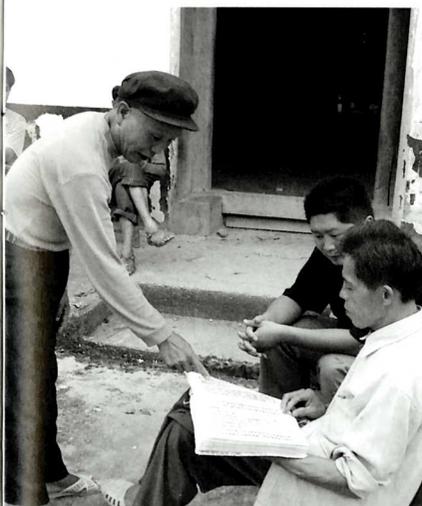
光収益を上げる目的で設立された。五つのタイ族集落からなり、亜熱帯の植物や自然環境、タイ族の高床式住居などからなる集落景観が郷愁を誘う。経営主体は、同地区の国营農場の経営者を中核に組織された「西双版纳傣族園有限公司」である。

こうしたスポットを訪ねてみれば、すぐに気づくことだが、ここでは、タイ族の風俗習慣や宗教儀礼が観光商品として演出されている。最近、同園はタイ族の水かけ祭りをまるごと体験できる「洗水節・印象」というスポットを、タイ族園と同じ周遊ルート沿いに建設した。入場券を買って公園に入ると、カラフルな民族衣装を身につけた大勢のタイ族の娘たちによる出迎えを受け、水かけ祭りを時期を問わずアトラクションとして体験できる。アトラクションとして演出された民族文化は、村民の生活を維持するうえでもはや不可欠なものとなっている。

エスニックマーカ―としての道教宗派

吉野 晃
(よしの あきら)

東京学芸大学教授



盤ヤオの祭司が経典を説明しているところ (広西チワン族自治区金秀大瑤山)

広西チワン族自治区の金秀ヤオ族自治区は、一大山塊がそのままとなつている。その山のなかには、少数民族のヤオ族が集居している。ヤオ族といっても均一ではない。金秀のヤオ族は五つのエスニックグループにわかれており、漢族からは茶山ヤオ、花藍ヤオ、坳ヤオ、山子ヤオ、盤ヤオとよばれてきた。これらのグループは、それぞれ言語も慣習、衣服も異なる。そうした言語と文化の違いは、それぞれが相互に意識している。言語の違いは明らかだし、衣服も特に女性の衣服は際だって異なる。このような、他のエスニックグループに対比して自らのエスニックグループの特徴を示すものをエスニックマーカ―という。

彼らのエスニックマーカ―は言語や衣服だけではなく、金秀の盤ヤオの祭司に儀礼の話聞いていたときに、他のヤオとの儀礼の違いに話がおよぶと、彼らは事細かにエスニックグループ間の儀礼の違いを説明してくれる。ヤオ族の宗教は道教の影響が強く、異なるエスニックグループのあいだでも同じような儀礼がおこなわれているが、似た儀礼でも、その儀礼次第や、参加者の規定などはエスニックグループごとにかなり違っていた。

そのときに、盤ヤオは、太上老君(老子)を奉ずる梅山教であり、他のヤオや漢族は茅山教や閩山教という道教の別派であると聞いた。ある祭司は、盤ヤオは梅山教、山子ヤオは茅山教、漢族は閩山教であると言い、もう一人の祭司は、盤ヤオは梅山教で、山子ヤオ、坳ヤオ、花藍ヤオは茅山教であり、漢族は茅山教だろうと語った。

祭司たちの言は、盤ヤオが梅山教であることではおおよそ一致しており、その他の、漢族を含むエスニックグループについては諸説が交じっている。興味深いのは、道教の基盤をともにしていること認識したうえで、その宗派の違いがエスニックグループ間の差異として、明言されることである。異なるエスニックグループのところで盤ヤオの祭司が頼まれて儀礼をおこなうこともあり、相互に交流がないわけではない。言語や衣服などの違いとは異なり、漢族も含めた道教の共通の基盤のうえにさらに細かい差異を設定している。このように、金秀のヤオ族のエスニックグループ間の違いの認識は、エスニックマーカ―の複雑な設定のうえに成り立っているのである。

西南中国

特集

モノ グラフィ

民博のお宝映像 お蔵入り映像

大森 康宏（おおもり やすひろ）

本館名誉教授
立命館大学教授

民博オリジナル映像のネガフィルム原版が収められている、12℃定温管理された映像音響資料収蔵庫



1994年制作「津軽のカミサマ」を撮影中の筆者



民博は、設立当初から民族誌や民族芸術にかかわる映像ライブラリーの機能をもつこととされ、既存の映像資料の収集や制作に力を入れてきた。そのため、この三〇年のあいだに、さまざまなかたちで収集や制作された映像が数多く保管されることとなった。研究資料としての映像、ビデオテープを通じた館内での一般公開映像、研究成果としての映像作品、などその目的はさまざまであるが、これらは相互に関係し合っている。

収集に関して見れば、一九七五年以降、積極的に映像の購入に努め、ドイツ科学映画研究所の映画コレクション「エントアイクロペディア・チネマトグラフィカ」をはじめとして、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、英国、フランスなど海外で製作されたもののほかに、国内の映像製作会社からも、多くの映像を購入した。ただしこれらのなかには、館内での研究利用に限るものが含まれている。一九七七年からの



1977年10月20日に民博を訪れたレヴィ=ストロース氏夫妻を囲むパーティーの様子。右端は初代館長梅棹忠夫



日本展示場、秋山郷民家の移築作業

（著者が1977年に8mmカメラで記録した映像から）

オセアニア展示場にて
チエチエメ二号の帆柱取り付け作業の様子



ど、研究者が映像制作にどう関与するかの問題や、撮影という行為が現地に与える影響などの議論が起きた。これを受けて、一九七八年以降、民博ではできるだけ映像の自主制作を目指すようになった。

この動きには、映像民族学の研究分野を開拓するという民博設立当初からの方針も生かされている。わたしが中心となり、研究者とともに撮影クルーを派遣して自主制作する体制が整えられていった。こうして制作された映像のなかには、今や既に失われてしまった現地の儀礼や習慣などを記録した貴重なものも多く、ときにはこれらが現地文化の再生のために活用されたこともあり、民博の役割のひとつを民族誌映像が担った好例と言える。

自主制作された映像のなかには、民博自体の活動記録や、また、さまざまな理由で編集に至ることができないまま「お蔵入り」となっている映像もある。

前者には、研究公演、退官記念講演、各種シンポジウムや講演会の記録、広報事業や特別展の展示記録がある。例えば、わたしがハミリフィルムで撮影した、民博展示場開館直前までの活動を記録した映像があり、展示場の建設現場、開館式典の様子、当時の研究部の日常や、レヴィ=ストロース氏が民博を訪問した際の模様などが記録されて

いる。民博の活動を記録した映像アーカイブズであり、お宝映像と言えるものだが、未整理・未編集である。そのほか、著作権など権利問題が未処理のもの、伝統技術の記録映像を撮影する途中でその技術保持者が亡くなったために中断したものの、民博を訪れた海外研究者によるパフォーマンスを撮影したが許可をえていないので編集ができないものなど、研究資料としては利用できるがそのままだけは公開できない映像も存在する。

これら映像は、その記録媒体の劣化などの問題をはらんでおり、あらためて整理・編集し、メディア変換をおこなうなど、保存と活用を考えねばならぬ時期にきている。日本の各大学や研究機関においても、さまざまな活動記録映像が作られたものの、その整理や編集が不十分なまま埋もれている映像が数多くあると聞く。科学研究現場の実態や研究者の意見などを広く市民に公開し市民との対話を深めようという、科学コミュニケーションの必要性の議論が高まっており、その意味でも、研究所の活動記録から成る映像アーカイブズの整備が今後は重要になるであろう。

整理や著作権関係の処理を進めてお蔵入り映像をお宝映像に変え、広く公開していく努力が、民博を含む多くの大学・研究機関に求められているのだ。

展示場一般公開に合わせて、ビデオテープ番組を充実するために、既存映像の購入、あるいは外注による映像制作が積極的に進められた。しかし、番組の劣化にもなつて複製を作るには、著作権上多

額の費用が発生することが明らかになってきた。さらに、外部委託制作した場合に、研究資料として記録すべき部分とらえられていなかったり、学術的な裏付けのある情報に支えられていない

メキシコの「お盆」

鈴木 紀 (すずき もとゐ)

本館先端人類科学研究部



ソコヌスコ地方博物館 /
メキシコ

が帰ってくる」と信じられており、それらを迎えるための伝統的な祭壇が展示されていた。死を象徴する骸骨や、さまざまな供物、色紙などが美しく飾られていた。ふと横をみると、驚いたことに「Festival Obon」という文字が目に入った。現地の日系クラブのメンバーがこの特別展に参加して、「お盆」を紹介していたのである。「先祖様の霊がもどってくる」という「お盆」の説明とともに、神棚や墓の模型など、日本の宗教文化が陳列されていた。さらに死の象徴なのか、はたまた現代日本のオタク系文化の紹介なのか、妖怪のフィギュア(人

ソコヌスコ地方とはメキシコ南部チアパス州の太平洋岸東部一帯の名称である。同地方の中心都市タバチュラ市の中央広場に面してアールデコ様式の建物が建っている。これはかつて市庁舎として使われていたものだが、ソコヌスコ地方博物館はその内部にある。開館は一九八八年、別名ソコヌスコ考古学博物館ともよばれる。

わたしは現在ソコヌスコ地方の農村開発の研究をしており、タバチュラ市に足を運ぶことが多い。二〇〇七年一〇月末、調査資料の整理の合間、気分転換にソコヌスコ地方博物館に歩いてみた。

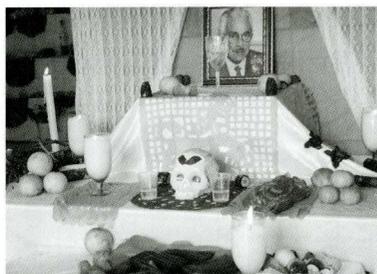
見学を終えて思ったのは、この博物館がふたつの重要な役割を果たしているということだ。第一に地元住民にソコヌスコ地方の文化遺産のすばらしさを伝える役割である。展示物の大半はタバチュラ市近郊のイサバ遺跡の出土品である。なかでも石碑と土器のコレクションが充実している。一般にイサバはマヤ文明の形成に影響を与えた地方文化として知られているが、この博物館ではそれにとどまらず、先スペイン時代の主要な都市文明としてイサバを描いている。人びとは紀元前一二五〇年から紀元後一二〇〇年まで長期間にわたってイサバに居住したという。他にオルメカとアステカの遺物も展示されているが、それらはそれぞれイサバの前と後の文明というあつかいである。地元の小中学生の見学が多いらしく、子どもたちが手にふれて能動的に学べるように、展示方法にも工夫があった。

第二に地元住民の文化発信の拠点としての役割も見逃せない。わたしが訪問したときには、考古学資料の常設展とは別に、入り口ホールで「死者の日」の特別展が開催中だった。メキシコでは一月一日と二日に死者の霊

形が目をひいた。そういえばここ数日、タバチュラの街ではアメリカ風のハローウィンの飾りやコスチュームがたくさん売られていた。この特別展は、流入するアメリカ文化に対する地元住民の対抗意識のあらわれとみてよいだろう。

メキシコの地方都市には、ソコヌスコ地方博物館のような、小規模博物館が多数存在する。その地方ならではの歴史解釈や文化発信に出合えるため、わたしはこうした博物館は捨てがたい魅力をもっていると思う。

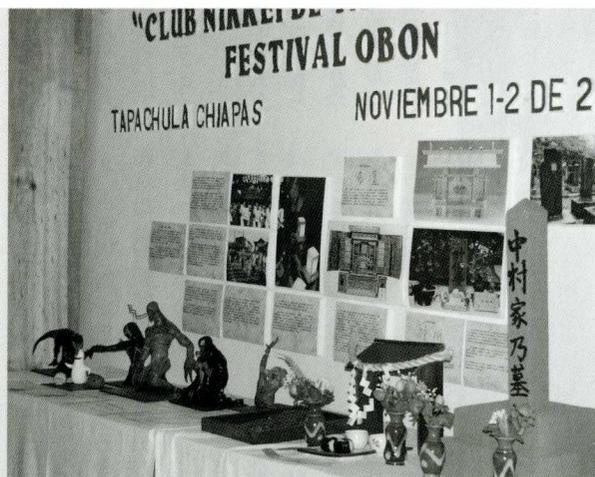
タバチュラ日系クラブによる「お盆」の展示



死者の日の祭壇。ユーモラスな骸骨が死を象徴する



イサバ遺跡からの出土したカエルをかたどった土器



ソコヌスコ地方博物館が入るタバチュラ市旧市庁舎の建物

あやつり人形劇の人形

あやつり人形(左から、沙悟浄 標本番号H215315、三蔵法師 H215314、
孫悟空 H215312、猪八戒 H215313)

塚田 誠之(つかだ しげゆき)

本館先端人類科学研究部



チワン族は、中国の少数民族のなかで最大の人口を有する。言語はタイ系に属し南方方言がある。九〇パーセント以上が広西チワン族自治区に居住する。伝統的な文化として高床式住居、歌掛け祭り、行事食としてのモチ米食品への嗜好性などが知られているが、歴史上、漢文化の影響を強く受容しながら文化形成をおこなってきた。

あやつり人形劇(木偶戯)は広西のなかでも西部の靖西県付近のみで伝承されている。清代中ごろに外部から伝わり、遅くとも一九世紀初めまでには形成されたようである。北方から来た軍隊が当地に駐屯した際におこなわれたとか、初代の師匠がベトナムで学びもち帰ったなど諸説がある。上から糸で人形をつるす形式のあやつり人形は中国南部には少ないこともあって、また師匠から徒弟へと伝承されるため、その由来につ

いては不明な点が多い。

春節(旧暦正月)から三月までの農閑期に屋外に小屋をかけて演じられる。観覧料は県内各地の勸進元の村の農民がもち寄るほか、食事や酒もふるまわれる。演目は「水滸伝」「西遊記」「三国演義」など漢族の歴史小説、とくに戦争に題材をとったものが多い。表紙は「西遊記」である。戦闘シーンや勸善懲悪の場面はつきものだ。

上演する際にはシナリオを見ないで、即興で演じられ、またチワン語のせりふ以外にチワン族の歌を交えるなど特徴がある。演じ手は一人で数体の人形をあやつる熟練のワザが求められる。伴奏者は二〜五人で、楽器には二胡・三弦やドラが使われる。人形は頭部をはずして入れ替えて使用される。衣装は専門の職人の手作りである。もつか靖西県政府が無形文化遺産として登録しよう申請している。



ソロモン諸島の「公平」さ

田中 求 (たなか もとむ)

東京大学大学院農学生命科学研究科

鍋や皿の声に聴いて

ソロモン諸島のビチエ村の人びとは割り算が苦手だ。足し算ならば指を使えば良い。足りなければ、ノットにたくさん線を引いて、答えらしきものをひねり出す。ただし、割り算は大変だ。指を切りわけられるわけにはいかないし、葉っぱをちぎるのにも限界がある。でもビチエ村の人びとは、「公平」な分配が苦手なわけではない。

村人は焼畑、漁撈採集を生活の柱にし、収穫物をみなでわけ合うことが多い。カツなどがたくさん獲れると浜辺に鍋が並べられる。でも単純に魚と鍋の数を計算し、均等にわけていく、なんてことはない。

この鍋のもち主の家は食いしん坊の子どもがいるからこれくらいかな、ばあさんの好きなハラワタも入れとこう、この家は漁に出る人もいないし久しぶりの魚だろうから多めに入れといてあげよう、とか単なる計算では計れない要素によってわけられていく。鍋は単なる鍋ではない。そのもち主の性格や生活を語るのだ。調理物のやりとりも活発だ。調理小屋をもっていた一九世帯に対して、二〇〇二年八月二日から二七日までの他者への調理品などの贈与状況を調査したところ、贈与回数は計一三一回であった。一世帯平均で六・九回、調理品や収穫物の他者への贈与をおこなっていたことになる。食事どきになると、高床の階段をトコトコと他家の子どもが皿をもって上がっ

てくる。食事後、皿が台所に並ぶ。皿は語る。さあお返しをもつていくのだと。皿は溜まれば溜まるほど叫び声を高めていく。それは村人の、村で生活していくうえで、の良心にビキビキと響き、村人同士を繋ぎ、また縛っていく。その響き具合は、村のまとまり具合を示すのかもしれない。

お金の「輝き」に惑わされ

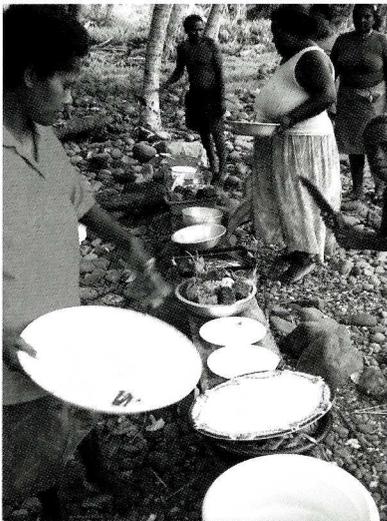
ビチエ村では何度か商業伐採がおこなわれ、伐採権料がもたらされた。伐採されたのは、みなで利用してきた森林だ。だから、各家の子どもの数、収入の有無と多寡、最近の経済的な事情などを考慮しつつ「公平」な分配が試みられた。しかし、伐採権料の着服が生じ、また分配金の少なさに不満をもつ者もいた。

お金はいろんな物に交換でき、またたくさんもつていても腐ってしまうこともない。増えれば増えるほど、多ければ多い

ほど良く、人の心に欲望に訴えかけ続ける。村で生活していくうえで、の良心の響きよりも、お金の輝きに魅せられてしまふ人もいる。お金はその「輝き」で村人の良心を覆い隠し、「公平」な分配をととても難しくするのだ。

なんでも単純な割り算で均等にわけることが「公平」なのではない。おそらくそれは人を単なる物と見て、皿を鍋を単なる入れ物と見る、思考停止の無機質な状態のなかでの「公平」なのだろう。そうでない社会では、そんなわけ方は「公平」からはほど遠いものになる。

みんなが共通の生活基盤をもち、人間臭くて、面倒臭くて、「良心の縛り」のある社会での「公平」は、皿や鍋の声を聞くことだろうか。知ることができるのかもしれない。そんな声を聞きとるため、またその声を響きにくくさせる「お金」とは何が、考えながらフィールドワークを続けていきたいと思う。



新年の料理をわける村人たち (2006年1月)

教科書を書き写す真剣さはすごいが、割り算は苦手だ (2005年8月)





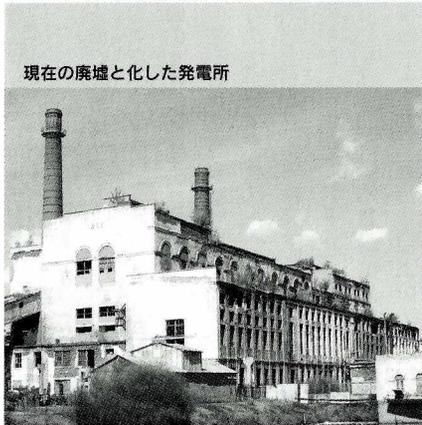
モンゴルの「産業遺産」

前川 愛 (まえかわ あい)

本館外来研究員

工業化のシンボル

一九二一年に世界で二番目の社会主義国になるまで、モンゴル国では近代の意味での工業はなかった。社会主義の思想の下に、遊牧社会に「工業」を産業として確立すべく、首都ウランバートルに大規模な資本が投じられたのである。それ以前のウランバートルは、寺院を核とす



現在の廃墟と化した発電所



操業当時(1960年代)。

国立映画・写真・音声アーカイブズ所蔵

る門前町に、ユーラシア大陸の交易中継の機能が加わった程度でしかなかった。もし、モンゴルが社会主義を経験しなかったならば、都市の建設と工業化は、これほどの規模では生じなかつただろう。

国^{こく}是である工業化を実現させるため、初の大規模発電所がソ連の援助で建設された。発電所は一九三四年に操業し、「中央電力コンビナート」とよばれ、一九八〇年代まで工業開発や都市生活の近代化を進める電気を生み出していた。

発電所は工業化のシンボルのひとつとして、国家的な記録媒体にその姿が多く残されている。工業成長のエネルギーを生み出す、輝かしい役割を強調するために、写真や映画に写されているのだ。一九四八年には発電所に、革命の英雄の名前「スフバートル」がつけられるなど、まさに「国家成長の熱源」としての表象を見ることが出来る。

物質としての存在感

わたしはこの発電所をウランバートルでおこなわれた東京大学の近代建築調査に参加して知った。第二、三、四発電所に役割を引き継ぎ、現在は廃墟のまま放置されている。公式には国有財産だが、敷地内に廃材集めの中国人が作業所を開いて占有しているために、所有状態は不安定だ。建物と土地がいつ国有財産私有化リストに入れられてもおかしくない。

この建物のもつ物質としての存在感の大きさと美しさに、わたしは圧倒されてきた。モンゴルを訪れる度に、壊されていないかを確かめている。建築家や写真家の友人がモンゴルに来れば必ず連れて行って見せ、モンゴルで事業をしている人たちにも建物を保存しつつ再生する方法がないかを相談してきた。多くの人はそのアバンギャルドな美しさに興奮し、何故こんなものがここに？と驚く。

発電所のことを調べるうちに、モスクワにとてもよく似た発電所があることがわかった。スターリン様式の代表的な建築家であるシヨルトフスキーが設計した第一発電所である。ソ連の工業化政策を^{おこ}して、モンゴルでまったく同じものが作られた可能性は大きい。あるいはソ連邦各地や他の社会主義国にも同じ設計で建設されたかもしれない。この発電所は社会主義という思想によって、世界に同時に流通した物質文化があつたことを示している。

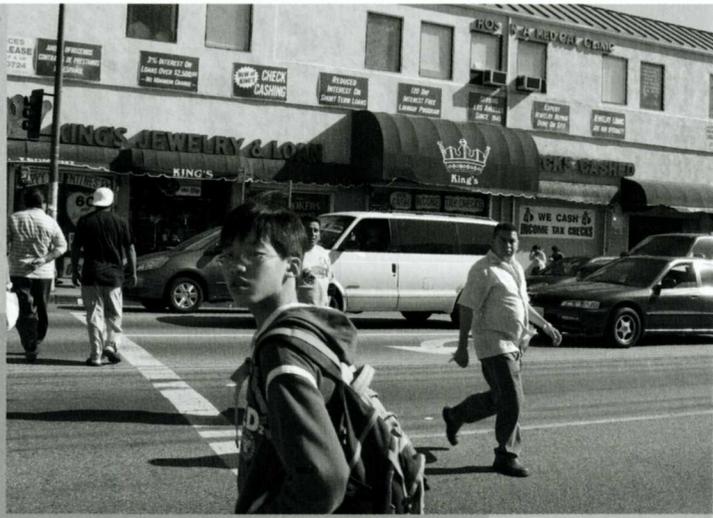
この発電所をモンゴル近代化の記憶を想起する遺産として残し、再生する、という試みをモンゴルでさまざまな人たちが考えてみたい。モンゴル初の「産業遺産」の議論を始めることになるだろう。実際に保存できるめどはまだたっていないけれども、その果たした歴史的役割を考えると、この発電所こそはモンゴルにおける産業遺産の議論の「始動機」としてふさわしいのではないだろうか。



韓国では1歳の誕生日を「トル」という。民族衣装で着飾って一生に残る記念写真を撮る



アメリカのロスアンゼルスで。ここはメキシコからの人たちが
多い。でも、みんなアメリカを自分の国だと思っているらしい



이천이년 구월이일
저는크대대면월드컵한국대표선수
게되
가되고싶습니다.
되
월드컵 한국대표선수 중에서 누구를 제일
좋아해요?
저는 이운재를 좋아합니다.
합
왜 이운재 선수를 제일 좋아해요?
골키퍼를 하고 있는 나카모
가
일본 선수중에서는 누구를 제일 좋아해요?
나카타 선수를 제일 좋아 해요
오세요?
멋지 나카모,
지 가
안녕히 주무세요! 엄마도 안녕히 주무세요!

小さいころから母と韓国語を勉強している。
ノートに韓国語でチャットをしながら
読み書きの勉強をしている



学校の野球部の
友達と一緒に(右端)

外国人 として 生きる

僕のこと

ハンチエドン

大阪教育大学附属池田中学校

韓国人として生まれて

僕は大阪府に住んでいる中学校三年生の男子だ。生まれも育ちも日本だから、韓国の文化や習慣のことはあまり知る機会がない。僕の両親は生まれも育ちも韓国なので、日本文化のエッセンスが入った僕とは、ときどき衝突する。例えば、日本の子どもは親に対してことは遣いにあまり気を付けないが、韓国は儒教の影響もあってか、親に限らず目上の人には礼儀を尽くさないといけない。それで親は僕に不満らしい。

話しかわるが、親によく「大人になったらどこに住むつもりなの？」と聞かれる。大阪が東京か、という狭い話ではなく、韓国か日本か、という国際的な話である。僕は「日本に住む」といつも答えている。しかし、よくよく考えてみると、果たして日本が僕のような外国人にとって、本当に住みやすい国なのか、また疑問に思う部分がある。例えば、日本に長く住んでいても外国人には選挙権がない。自分が安心して政治を任せられる人を自分の意志で選ぶ事ができないことは、辛いと思う。

それでも僕にとって日本はとても住みやすいところである。しかし親にとってはあまりそうではないらしく、アメリカに住む、ということも考えているらしい。アメリカには、ときどき行くのだが、正直

言ってあれ程外国人にとっても住みやすい国はないと思う。何でも自由にできよう。実際、僕の親戚はたくさんアメリカに住んでいるのだが、それを見てみると僕もアメリカに行くって大きいことをやってみたい、と思うこともある。アメリカに限らず、僕が何も知らない場所に行つて技術が発達しているが、貧しい国ではどうなのか、何故紛争が起きるのかなども知りたい。そんなことを僕は中学三年生なりに考えているけど、やっぱり僕には日本がいちばん住みやすい気がする。日本には友達が多いし、何より日本に住み慣れたのがその理由だ。

韓国名へのこだわり

僕は将来、日本国籍をとるつもりだが、名前は韓国名のままにするつもりだ。それは、僕の将来の夢が検事になることで、そのほかにもいろんな面で楽であろうし、一方で、自分が韓国人であるという形跡を残しておきたいのが理由だ。

学校で、友達には普通に接してくれる。日本語が流暢だったためなのか、韓国人ではなく名前がめずらしい日本人に見られることがよくあった。要するに僕は文化が同じだ。僕が韓国人であることを言っても特に友達の様子に変わりはしない。

僕にとっての韓国語

韓国語は小さいころから母が熱心に教えてくれた。韓国語が僕の将来に役に立つと思ったのだろう。実際のところ、家では家族で韓国語を話すことが多い。あまり外で韓国語を喋る機会がないが、友達に韓国人であることを言うと必ずといっていいほど聞かれることがふたつある。ひとつは「韓国語を喋ってくれ」、もうひとつは「辛いものは結構食べられるのか?」である。韓国語を喋って、と頼まれたときは、とりあえず思いついたことを喋ると喜んでくれる。なかには韓国語の悪態を中心に聞いてくる友達もいる。どちらにしろ僕にとって友達が韓国の言語や文化に熱中してくれることは嬉しい。そんな友達への満足そうな顔を見ると韓国の文化を教える職についていいな、とも思う。韓国語と日本語が話せることは僕にとってはたいしたことではないが、他の人から見るとすごいことらしい。僕にとって韓国語は初対面のひととの距離を縮めてくれる役目を担っている。

最後に僕が日本で生きてきて大事であると思ったことをまとめてみた。まず、他人と違っていてもそのなかでそれぞれ価値観を見出すことができること、そして他人と違うものをもっていても、それを自分なりに表現することである。



樹皮の接合や補修に使用される松脂

つなぎ合わされた白樺の樹皮

骨組みとなる縦方向の板材と横方向の板材を並べる

進水式での試験操船

舟底を松明の火であぶって清める

白樺樹皮舟
(標本番号
H236600、
H236601)

棒で挟み込んで樹皮をとし合わせる。鱧も同じように成形する。白樺樹皮舟の姿は、樹皮が白い外皮を内側に丸まろうとする力と、弾力がある縦の横板の反発力とが釣り合って保たれていたのである。

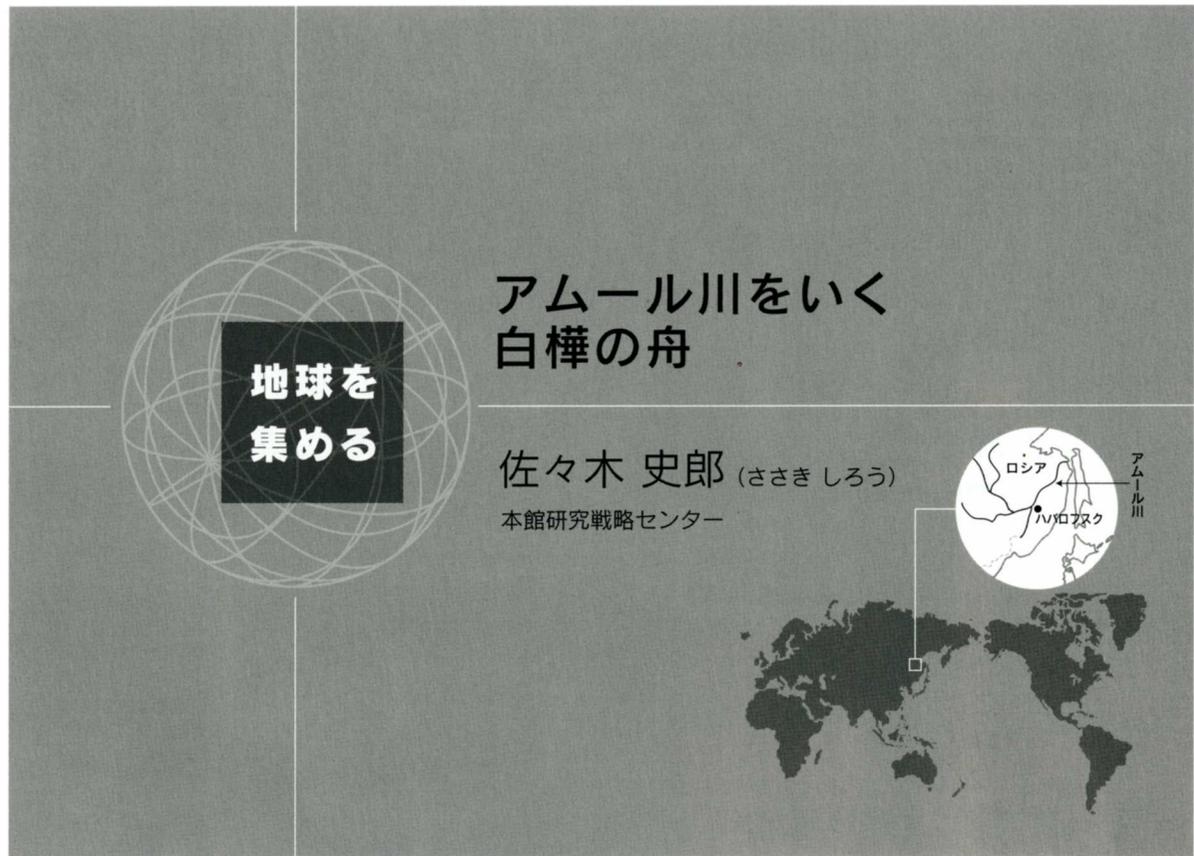
白樺は常温では堅いが、熱すると柔らかくなり、成形しやすい。そのため、細かい細工をする部分にはお湯をかけたり、火であぶったりして柔らかくする。収集された船の底には黒く焦げた部分が目立つが、それは樹皮を強く曲げようとして松明であぶった跡なのである。白樺の樹皮は縦方向にはとても強く、破れにくい。横方向には裂けやすいという欠点をもっている。製作過程で油断するとすぐに裂けてくる。製作者たちはそれに対処する方法も知っていた。小さな裂け目や、ちよつとした穴は松脂を溶かしたタールのようなものでふさいだり、つなげたりする。それでも対処できないような大きな裂け

目や穴があいたときには、樹皮のアツブリケを作り、それを松脂ですきまがでないようにはりつける。松脂は防水性が高いために、あちこちの補修に使われる。

船はできあがると底を松明であぶって清め、進水する。進水では漏水する部分を確認する。そしてその部分を補修して完成である。

操船は一本のバドルで、カヌーのように漕ぐのが基本である。しかし、川面から獲物に静かに近づくときには、両手にもった二本の棒で川底を押し進め、やはり両手でへら状の櫂をもって音を立たないよう進む。収集した舟は大型なので、もち運びは二人がかりだったが、積載量は一〇〇キログラムを超える。猟師が大型のヘラジカを積んでも沈まないようにできているのである。

この樹皮舟は補修をすれば何年も使える優れたものである。しかし、船先も船底も尖っているために、船外機をつけることができなかった。また、船体が軽いために、船に重い船外機をつけるとバランスが崩れるのである。そのため、舟の動力化が進んだ一九六〇年代以降、急速にすたれていくことになった。



地球を集める

アムール川をいく 白樺の舟

佐々木 史郎 (ささき しろう)

本館研究戦略センター

支流の人びとの舟

ナーナイは、ユーラシア大陸の北東部を西から東に貫いて流れる大河アムールの民である。アムール川は水産資源に恵まれているだけでなく、水運の大動脈でもある。この川は北東アジアの森や海の世界を中国の農耕世界やモングルの草原世界と結びつける働きをしてきたが、網の目のように広がる支流は、森の住民どうしを結ぶ重要な交通網であった。人びとは丸木や白樺の樹皮でできた小型のボートを使って支流奥深くに進出し、狩や漁に従事するとともに、各地の集落を訪ねて情報交換をしたりした。二〇〇五年の調査のときに本館に収集した白樺樹皮製のボートも、支流域で狩や漁に活躍した舟のひとつである。

在でも自分たちを本流の人びとと区別している。

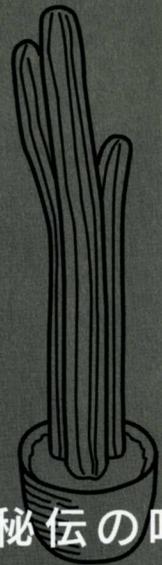
白樺樹皮舟はアムール川流域の先住民に共通に見られる小型の舟だが、本流域の沿岸に暮らす人びとのあいだではあまり見かけない。これは支流域に暮らす人びとの舟である。軽く、細身のため、浅くて流れが速い支流でその特徴がいかせるのである。今回収集したものは長さが五メートル以上、幅は五〇センチメートル程度である。主要な材料である白樺樹皮は、幅が一メートル以上あったことから、直径が三〇センチメートルを超える大木からとられていた。近年では環境の悪化のためか、このような白樺の大木はめずらしいという。

樹皮と縦の反発力

その製作過程は驚きの連続だった。骨組みと樹皮を一体にして成形してしまうからである。すなわち、船の長さの分につなぎ合わせた樹皮の上に縦方向に堅い唐松の板材、横方向に柔軟な縦の板材を並べ、横方向の板を船の側舷に当たる部分で押さえつけた後、一気に丸めて、基本的な構造を作り上げてしまふのである。それから、船先をホツケーのスティックのようなかたちをした

生きもの 博物誌

【サボテン】
ペルー



秘伝の味

山本 睦
(やまもと あつし)

総合研究大学院大学文化科学研究科

サン・ペドロと儀礼

ペルー北部の小さな村。満天の星と月明かりの下に響く、シャーマンの歌声と鈴の音。深夜の儀礼で使われるメサとよばれる祭壇の脇に、たつぷりと用意されている液体の正体がサン・ペドロというサボテンである。これだけ聞くとかなり怪しいが、ペルーでは多くの儀礼に使用されるため、ポピュラーな植物であり、市場などでも簡単に手に入る。また、その歴史も古く、紀元前の遺跡の石彫にサン・ペドロの姿を見ることが出来る。

儀礼のための準備はいたってシンプルで、水にサン・ペドロを入れ、煮出すだけである。重要なのは時間帯で、サン・ペドロが開花するといわれる夜10時には全てを終えていなければならない。面白いことに、準備のシン

ブルさに反して、できあがったサン・ペドロの味は、それを作るシャーマンによって個人差がある。基本的にはどこしが悪いうえ、苦味も強く、飲むと吐き気をもよおすともいわれる。ただし、シャーマンによれば、「清め」になるので嘔吐するのはいいことらしい。文字どおり体のなかをきれいにするのである。

シャーマンの儀礼の効果は、基本的に「癒し」である。シャーマンのもとには、人間関係、恋愛、病気や商売に悩む人などが訪れる。そこで、シャーマンは儀礼を通じて、特にサン・ペドロが見せる幻覚作用の内容について参加者と会話をしながら、問題の解決を図っていくのである。

わたしが儀礼に参加させてもらったシャーマンらによると、彼らが信仰するのは山や湖、遺跡などで、儀礼の際にはそれらが力を貸してくれるという。しかし、彼ら

とした修練をつまなければいけないし、何より才能が必要らしい。

ヤーマンになる気があるのかどうか訊ねてみた。「そのときになってみないとわからないよ」と、彼はわたしに笑いながら答えた。もし、三代目のシャーマンが生まれ

たときは、儀礼に参加し、親子三代にわたるサン・ペドロの飲み比べでもしてみようと思う。フィールドでの楽しみが、またひとつ増えた。

ところで、儀礼にはシャーマンと儀礼の依頼者のほかにアシスタントも参加している。彼らは、儀礼の準備から後片付けまでをシャーマンとともにし、ときにはシャーマンに代わって、参加者に儀礼手順の説明をしたりするなど、儀礼には欠かせない存在である。じつは、現在、この儀礼のアシスタントを二代目の子どもにあたる若者がおこなっている。小さなころからいつも儀礼に参加していたそう、彼は既に儀礼を熟知している。こうやってシャーマンになっていくのかとも思ったが、事態はそう簡単ではないらしい。シャーマンになるにはきちん

シャーマン一家との楽しみ

は敬虔なキリスト教徒でもある。よって個人差も大きい。儀礼に使用される祭壇には、十字架やキリスト教の聖人の置物から刀、ライフル、形状や色彩の特徴的な石遺跡から掘り出された石器など多彩なものが並ぶ。

これまで、親子関係にある、この地域では有名な二人のシャーマンの儀礼に参加する機会があった。わたしはこのシャーマン一家とのつきあいはかれこれ四年になるが、彼らとのつきあいは儀礼だけではとまらない。村では一緒に食事をしたり、酒を酌み交わしたり、馬鹿話をする仲でもある。

以前、発掘をおこなう遺跡で、調査の無事を祈って儀礼をおこなった。このとき、わたしにこれまでサン・ペドロによる幻覚や嘔吐の経験がないことをよく知る二代目のシャーマンが、にやにやしなから近づいてきて、ある液体を手渡した。特殊なサン・ペドロだというのが、明らかに原液に近い。飲んでみたのはいいが、さすがにこれには耐えられず、苦しんでいるわたしの横で二代目は声をあげて楽しそうに笑っていた。

市場で売られるサン・ペドロ
(中央手前)



2代目の儀礼のアシスタントをする3代目(右)?



儀礼をする初代シャーマン



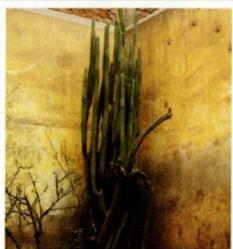
原液に近いサン・ペドロを恐る恐る飲む筆者



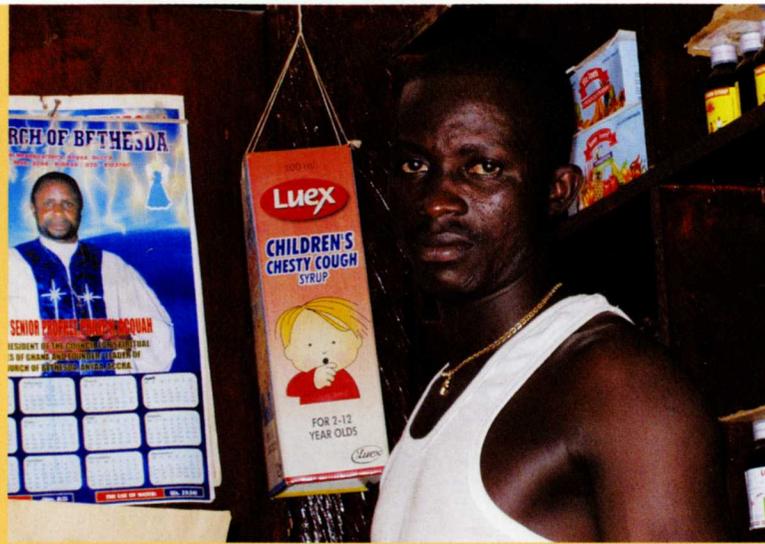
儀礼に使用される祭壇。
左の一斗缶の中身がサン・ペドロ

サン・ペドロ・サボテン (学名: *Trichocereus pachanoi*)

メスカリンを含有し、個人差や服用時の精神状態、環境状況にもよるが、服用すると幾何学模様などの幻覚作用をもたらすサボテン。ペルーなどアンデス地域では、広く、シャーマンの儀礼に用いられる。名前のサン・ペドロはスペイン語でキリスト十二使徒の一人で、天国の鍵を与えられたという「聖ペテロ」を意味している。これは同様に、サン・ペドロが、その幻覚作用により、異世界への道を拓くものとされているからである。



店のなかのリチャード。壁には薬のポスターと教会のカレンダーがかかっている

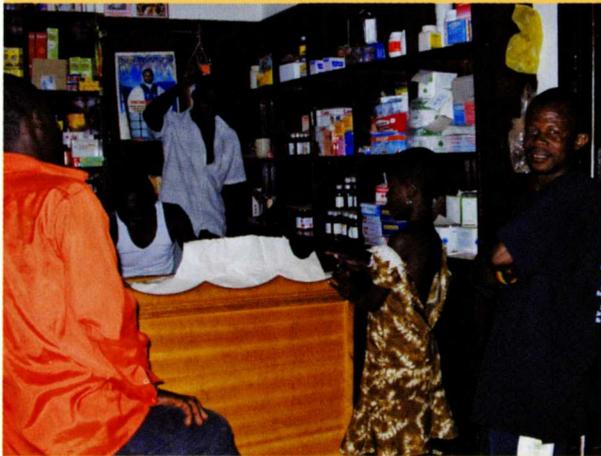


ケミカルセラーと向き合うとき、民族学者もまた葛藤を抱えることになる。目の前でおこなわれる危険な行為を黙って見過

ごすことはできない。とはいえ、一人のケミカルセラーの違法行為を非難したところで、状況は何ひとつ変わらない。かとい

って、例えば、注射のとり扱い方をアドバイスすることは、法律違反を助長することになりかねない。今、ここで何をどうすべ

きなのか。正しい答えも、究極的な解決も見つけられないわたしは、常にどこか間違っている選択をし続けている。



夜は多くの顧客が集まるリチャードの店。お使いの少女は痛み止めを買っていった

多くの疾病に効果のあるクロラムフェニコールは、慢性貧血を引き起こす



この町は、カカオやヤシやオレンジの畑にとり囲まれている



怪我や病気のときには

「頭が痛いんだけど」「子どもが病気の」「サソリに刺された」……。怪我をしたとき、体調の悪いとき、町の人びとはリチャードの店にやってくる。三〇歳代中ごろの彼は、いざというときに頼りになる男である。下痢や腹痛に悩まされることの多かったわたしも、いつも頼りにしていた。

ガーナ南部、人口一万人弱の小さな町にリチャードの店はある。六畳ほどの店内には、さまざまな種類の薬がところ狭しと並べられている。その多くは、パラセタモールなどの鎮痛剤かペニシリンな

どの抗生物質だ。「アフリカの薬」と聞くと、薬草や呪薬を思い浮かべる人が多いかもしれない。しかし、少なくともわたしの調査した二〇〇五年から現在に至るまで、ガーナの田舎町に暮らす人びともっとも頻繁に使用するのは、日本で暮らすわたしたちとさほど変わらない医薬品である。

リチャードは、医師や看護師、薬剤師が大学で受けるような、専門的な教育を受けていない。その代わり、「ケミカルセラー」という資格をもっている。ケミカルセラーには、鎮痛剤や抗マラリア薬など三〇種類程度の薬の販売が許可されている。ガーナの農村部には、医師や薬剤

師のいる病院や薬局が近くに無いところも多い。そのため、ケミカルセラーは、農村部で暮らす人びとにとって、きわめて重要な薬の入手先となっている。彼も、そんなケミカルセラーの一人である。

町一番の成功者

リチャードの店は、町に四軒あるケミカルセラーのなかでもっとも繁盛している。実際、さほど人口の多くないこの町で、毎日一五〇人以上の客がこの店で薬剤を買っていく。この数は、町の一八歳以上の人口の六パーセント強に当たる。リチャードは、この町でもっとも成功している人の一人と目されている。店のなかには、薬とともにテレビやパソコンが置かれている。一九九九年に電気のおつたばかりのこの町では、テレビをもっている者はさほど多くない。そのため、サッカーのガーナ代表が試合をするともなると、店は即席の観戦会場となる。集まってくるのは、彼がスポンサーの一翼を担う町のサッカーチームの選手たちだ。店の前をとる老人が、まだ年若い彼に深々とお辞儀をすることもめずらしくない。

もの、多くの客は単純に薬の名前を告げて買っていく。

おそらく、お客の大半は彼の治療者としての腕前にあまり期待していない。同じ町のなかでは、信頼の厚い看護師が診断や治療をおこなっているし、近くの町の病院には医師もいる。すぐに安く薬を買えることが、店の人気の理由といえるかもしれない。町の中心部にあるバス停に隣接しているという立地の良さもあるだろう。だが、わたしには、人に安心感を与えるような彼の話し方や、散歩好きな他のケミカルセラーたちとは異なり、いつも店にいたることが成功の大きな理由であるように思える。

危ない薬も

ケミカルセラーは、ガーナの医薬品流通システムが抱える矛盾の焦点となっている。医師や看護師、薬剤師の少ないガーナでは、ケミカルセラーがいなければ、農村部に薬を普及させるのは難しい。しかし、問題が無いわけではない。抗生物質や注射など売ってはいけないはずの薬も日常的に販売されているからだ。そのなかには、慢性貧血という深刻な副作用を引き起こす危ない薬も含まれているし、注射を打つときに必ずしも感染症に対するケアが充分になされているわけでもない。



ガーナの薬屋さん

浜田 明範 (はまだ あきのり)

一橋大学大学院社会学研究科

開館30周年記念

みんなく ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

■時間：14:30～15:30(予定) ★3月30日のみ時間変更

■参加費：無料(ただし、常設展観覧料が必要)

*毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。



焼畑のなかでトウモロコシの収穫を神に感謝するマヤ農民

実施日・話者・話題・場所

3月2日(日)

太田 心平 (先端人類科学研究部助教)
キリスト教でひもとく現代韓国
於:朝鮮半島の文化展示

3月20日(木・祝)

川口 幸也 (文化資源研究センター准教授)
アフリカのアート アートのアフリカ
於:アフリカ展示

3月23日(日)

鈴木 紀 (先端人類科学研究部准教授)
焼畑の恵みをいつまでも
於:アメリカ展示

3月8日(土)

吉本 忍 (民族文化研究部教授)
消滅した日本の織機
於:常設展2階展示場入口

3月22日(土)

菊澤 律子 (先端人類科学研究部准教授)
ことばと歴史のビミョーな関係
於:常設展2階展示場入口

3月30日(日)★時間 15:30～16:30

杉本 良男 (民族社会研究部教授)
インド 魅惑のサリー
於:南アジア展示

※詳細は、ホームページをご覧ください。都合により、予定を変更することがあります。

編集後記

中国製の冷凍餃子の事件をきっかけにして、日本の食糧がいかに中国に依存してきたのかを考えさせられる毎日。現在の日本人の暮らしは、中国との関係を無視しては成り立たない。その一方で、わたしたちは、中国のことをどこまで知っているのだろうか。パンダ、万里の長城、経済成長、オリンピックといった程度のイメージしかない。今月の特集では、西南中国というあまり聞きなれないことが使われている。地図を見ると中国の西南部はチベットであるように見えるが、東南アジアに隣接する地域をさしている。そこは漢族から見た西南部であり、チワン族、ペー族、トン族、ヤオ族など多くの漢族以外の多様な少数民族が暮らす「もうひとつの中国」が紹介されている。

2006年の4月から編集長を務めてきましたが、次号から編集長がかわります。この雑誌は32年目に入り、今後の雑誌のあり方をめぐってさまざまな意見が出ておりますが、あらたな発展を続けていくことと思います。引き続き御愛読くださるよう御願いたします。(池谷和信)



2008年3月号

第32巻第3号通巻第366号
2008年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敬夫

編集委員 池谷和信(編集長) 榎永真佐夫
久保正敏 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます

交通案内

■大阪・千里万博記念公園内

●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。

●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

